

第4回（平成14年度）  
損保ジャパン記念財団賞  
受賞者記念講演録

著書部門

『精神障害者の地域生活支援

—統合的生活モデルとコミュニティソーシャルワーカー—

長崎ウエスレヤン大学 教授 田中 英樹

論文部門

『高齢者ケアマネジメントにおける倫理的意思決定

—ソーシャルワークにおける道徳的推論の適用に関する

議論からの一考察—

愛知県立大学 助教授 田川 佳代子

\*日時\* 平成15年6月21日 午後2時より

\*場所\* 東洋大学 井上記念館（5号館 5B12教室）

平成16年1月

財団法人 損保ジャパン記念財団



## 第4回損保ジャパン記念財団賞受賞者

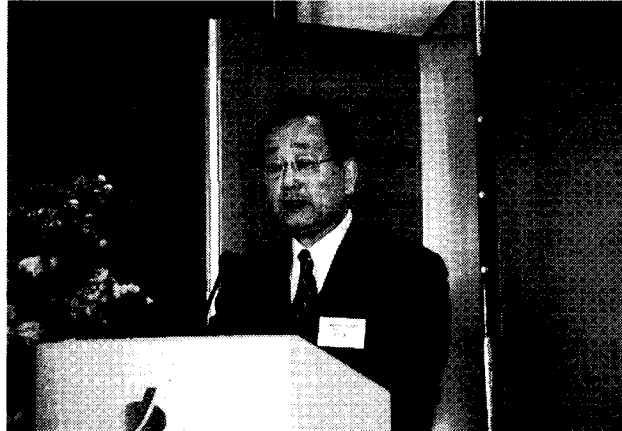


左から 田中 英樹氏、有吉理事長、田川 佳代子氏

### 目 次

1. はじめに			
財団法人損保ジャパン記念財団	理事長 有吉 孝一	.....	1
2. 共催者挨拶			
東洋大学社会学研究科	委員長 古川 孝順	.....	2
3. 審査委員長挨拶			
損保ジャパン記念財団賞	審査委員長 三浦 文夫	.....	3
4. 記念講演録			
著書部門『精神障害者の地域生活支援』			
長崎ウエスレヤン大学 教授 田中 英樹	.....		7
論文部門『高齢者ケアマネジメントにおける倫理的意思決定』			
愛知県立大学 助教授 田川佳代子	.....		21
5. 第4回損保ジャパン記念財団賞贈呈式資料			
(1) 祝辞 厚生労働大臣 坂口 力	.....		30
(2) 審査講評 審査委員長 三浦 文夫	.....		31

第4回損保ジャパン記念財団賞贈呈式（平成15年3月24日実施）



有吉理事長



著書部門受賞者 田中英樹氏



論文部門受賞者 田川佳代子氏

第4回「損保ジャパン記念財団賞」贈呈式



審査委員長 三浦文夫氏



厚生労働省  
社会・援護局総務課長 宇野裕氏



田中氏とご家族（ご令嬢）



愛知県立大学 田川氏 愛知県立大学  
長谷川助教授 須藤助教授



後列左より 岡本審査委員、古川審査委員長、竹内審査委員  
前列左より 三浦審査委員長、田中氏、田川氏、古川審査委員



## 1. はじめに

財団法人 損保ジャパン記念財団  
理事長 有吉理事長

本日は、お暑い中、また長崎、広島、長野、群馬からまでもお越しいただき、誠にありがとうございます。この記念講演会は、記念財団賞の創設と同時に毎年実施しておりますが、今年は東洋大学様に共催として全面的にご協力いただきました。お手伝いいただきまますスタッフの皆様方にこの場を借りまして、心からお礼を申し上げます。

損保ジャパン記念財団は、損保ジャパンの前身である安田火災が昭和 52 年に設立しまして 25 年の間に、大きく分けまして 2 つの事業に取り組んでまいりました。

1 つは障害者、高齢者団体の在宅福祉活動に対する助成事業であり、もう 1 つが社会福祉ならびに損害保険の学術研究に関する助成事業でございます。特に、当財団は助成を通じまして、福祉活動の第一線の皆様とのふれあいと言いますか交流をし、一緒に問題を考えるというスタンスで事業を展開してまいりました。また、学術研究の分野では、4 年前にこの記念財団賞という事業を始めまして、財団としての活動を一段と幅広く展開できたと考えております。これからも、当財団は実践と学問の両面から、いささかなりとも社会福祉の向上に貢献してまいりたいと存じます。

お手元のパンフレットをご覧の通り、この財団賞は、日本社会福祉学会、日本地域福祉学会のご後援を得まして、審査委員には、三浦文夫審査委員長をはじめとして我が国の社会福祉分野を代表される先生方をお願いしております。先生方には休日を返上して、大体延べ 3 日か 4 日ほど審査会を開いていただいております。私どもは、事務方として側で不勉強ながら拝聴しているわけですが、社会福祉分野の新進気鋭の人材を育成したい、今この分野が実践の問題をはらみながら活気を呈している時であるからこそ、この社会福祉理論のレベルアップを図りたいという、先生方の熱意があふれておりまして、本当にお互いにご遠慮のない議論で、そのような学問的議論に接する機会の少ない我々会社人間には、毎回の審査委員会は聞いていて大変に知的刺激を受けます。審査委員会はそういう雰囲気の中で行っていただいております。

本日も講演いただきます田中先生、田川先生におかれましては、改めて第 4 回損保ジャパン記念財団賞の受賞を、改めてお祝い申し上げます。ご多忙の中、これはたまたまですが、お 2 人とも長崎から駆けつけていただいたということでございます。本当にありがとうございます。

なお、会場には本日も、社会福祉各分野の皆様がおいででございます。先ほどご案内申し上げましたとおり、講演終了後に簡単な交流会を用意しております。折角の機会でございますから、皆様方お互いに、また先生方との交流の場として是非遠慮なくご参加いただきますようお願いいたします。

本日もこの場を皆様方の研究や実務面において何らかのきっかけにさせていただき、日夜、研究、実務に励まれる社会福祉分野において、本賞を目指して頑張ってくださいということがございましたら、主催者としてこれに過ぎる幸せはございません。どうか時間いっぱいごゆっくりとお過ごしくださいますようお願いいたします。本日は、どうもありがとうございました。

## 2. 共催者あいさつ

**東洋大学大学院社会学研究科委員長  
損保ジャパン記念財団賞 審査委員 古川 孝順**

ただいまご紹介を頂きました、東洋大学の古川でございます。今日は共催ということで名前を連ね、この会場を提供させていただいております。東洋大学に多数おいでいただき、厚くお礼を申し上げます。東洋大学は 120 年弱の歴史を持っておりますが、実は井上円了という方がこの地に哲学館という名前で学校を、やがて大学をお創りになったのが出発点でございます。東洋大学というと、仏教の学校ではないかと思われる方がおられるかもしれません。確かに井上学僧と言いますが、井上先生は新潟県の浄土真宗のご出身で、本願寺の国内派遣留学生として東京帝国大学の第 1 回目の哲学専攻で勉強した方でした。

この井上先生は、別名妖怪博士とか、お化け博士という名前をお持ちでございます。ご本人が妖怪だったりお化けだったりするというのではなく、妖怪やお化けとかいう俗神話は信ずるに足るものではないとして、それを科学的に明らかにするということが心掛けておられた方です。同時に帝国大学の哲学科ですから、当然ヨーロッパで当時最新の哲学をひも解いておられますが、井上先生はそれを単に机上の学問として終わらせるのではなく、実践的に庶民の間で物事をどう考えるかというところに哲学のあるべき姿を見いだして、この地に哲学館大学をお創りになったといういきさつがあります。

そうした流れの中で、私ども社会福祉学科は学科として改めて成立しましてからまだ日が浅いわけですが、さかのぼりますと大正時代、大正デモクラシーの時代から今日まで社会事業の研究教育を課題としてまいりました。まさに井上円了の理論ももちろんですが、実践的なことに淵源、魂を発してそれを受け継いできたと自負しております。今日は損保ジャパン記念財団の第 4 回目記念財団賞受賞者の記念講演ということで、ご案内を差し上げたところでございます。

やや私事に渡りますが、一昨年に鉄道弘済会の『社会福祉研究』という雑誌の中で「社会福祉学研究の曲り角」というエッセイを書きましたが、若干物議を醸したところもあるようでございます。学会もちょうど 50 年に近くなって、来年、記念大会をここで開催する予定です。戦後の社会福祉学研究の歩みを重ねてきたわけですが、ここで新しい一歩を踏み出さないと単に従来の研究を継承するだけでは十分ではないのではないかという思いを持っております。そうした中で本年度の受賞者はもとより、記念財団の文献賞を取られた方々のいずれも新しい社会福祉学研究の第一線を切り開いていただいた、あるいはこれからさらにそれを広げていただける、そういう可能性を持った方々であろうかというふうに期待をしているところでございます。

今日はお 2 人のお話をこれから伺うわけでございますが、終わりました後、交流会の準備をしておりますので、皆様方時間を十分有効にお過ごしいただきますようお願い致します。租辞ではございますが、共催者としてのご挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。



### 3. 審査委員長あいさつ

損保ジャパン記念財団賞  
審査委員長 三浦 文夫

損保ジャパンの社会福祉学術文献表彰審査委員会の委員長を務めております。

それでは若干時間をいただきまして、審査の経過等をお話し申し上げたいと思います。内容につきましては、今日お配りしました資料「受賞者記念講演会」の中に掲載されております。審査講評と選考理由を詳細に述べておりますので、後ほどお読みいただければと思います。非常に限られた時間ですので、その中をかいつまんでお話し申し上げたいと思っております。

それに入る前に、まず今回の受賞者のお2人に心から祝意を表したいと思います。本当におめでとうございます。この第4回の審査に当たりまして、全部で16編の著書、7編の学術論文が寄せられております。これらの推薦に当たっていただきました、日本社会福祉学会、日本地域福祉学会、日本社会事業学校連盟等の団体、各関係者の方々のご協力に対しても厚くお礼を申し上げたいと存じます。

今回の平成14年度の審査ですが、平成13年4月から平成14年の3月31日までに刊行されました、著書、また社会福祉関係の学術誌、大学の紀要等で発表されました論文を対象と致しました。先ほど申し上げましたように著書は16編、対して論文が7編の推薦をいただいたわけでございます。著書には大変多方面に渡った内容がありました。審査委員会において審査を行い、最終的に2つに絞ってきております。

その1つが今回受賞されました、田中英樹氏の『精神障害者の地域生活支援』で中央法規出版から出されたものです。もう1つは狭間香代子氏の『社会福祉の援助観』で筒井書房から出されたものでした。この2つが優秀な著書という形で最終に残りました。審査委員会において2つの内容につき、かなり激しい論議が行われたわけでして、先ほど理事長さんからもお話があったように、かなり喧喧諤々、いろいろな形で議論が出されておりました。本当に甲乙つけがたい内容だったと思います。できるならば文献賞というものを一点ではなく、2つに折半できないかとか、「準」ないしは「優秀賞」という名前できないうまいかという議論さえ出たくらいです。最終的に最後までもつれ、2つとも大変優れたものであるということが、審査に時間を割いた理由であります。そのあたりの議論につきまして、審査の講評のところにまとめさせて頂いております。田中さんの著書については、後ほどご本人からの報告がございます。

多少異例ではございますが、狭間さんの『社会福祉の援助観』につきまして、若干内容をご紹介させていただければと思っております。審査講評に触れておりますが、特に1980年代アメリカのソーシャルワークの理論を非常に丹念に処理されました。その中で特に今、最近有力な見解になってきている社会構成主義、ソーシャル・コンストラクショニズムと言われている流れを受けとめながら、それに基づく最近のストレングス視点を軸にソーシャルワーク・エンパワーメントといった問題の理論を理論的に整理されました。

その上で、現代の社会福祉を援助する場合に基本的な視点といったものを論議されたと思っております。大変入念にアメリカの研究に目を通されておりました。それをご本人なりにいちいち整理をされた。この論文自体は日本社会福祉学会の機関誌『社会福祉学』に発表されたものでした。紙幅も限られているため、非常に的確にご本人なりにまとめられ、ご本人の意見を述べられています。研究論文としますと大変入念に、しかも非常に克明で、整理の上に立って自分なりの見解を打ち出しており、大変説得力のある内容であると思つたわけでありまして、この内容につきましては、審査講評に書いておきました。

それに対しまして、田中さんのほうの問題につきましては、精神障害者に対するいろいろな社会福祉相談のソーシャルワークの立場からのアプローチを中心に論議をされているわけです。この中で、田中さん自身の実践に立った研究を含めて、従来の医学的モデルから、一応生活モデルと言っておりますが、さらに一歩進められまして、統合生活モデル、あるいは地域の自立ということを軸に置いた生活モデルへという大きな流れをふまえられました。そこに至るアプローチを明らかにしようという形でまとめられた部分があります。当然ながらその内容としましては、単なる社会復帰を目指すだけではなく、障害者自身が地域の中でどう自立をするか、そういうこととの関連の中において、社会福祉、特にソーシャルワークの立場からどのようなアプローチが必要なのかという点を明らかにしておく。この流れはある意味では最近における障害者運動における1つの新しい方法でございまして、さらに先駆的な流れを示したものであると思っております。

それと同時にもう1つの特徴は、このようなアプローチを具体化するためのソーシャルワーク的なアプローチはどういうものであるのかということを追求されまして、改めてコミュニティソーシャルワークというものを提示されているということが大変特徴的ではないかと思つています。従来であれば、いわゆるケースワークの発展における、最近はそれにソーシャルワークという議論が出ておりますけれども、むしろどちらかというコミュニティワークの中にソーシャルワークを位置づけられるという、そういった点でこれは理論的にも大変興味ある問題であると同時に、今の実践の中でそれを裏付けられるという点で、大変興味のある新しい方向ではないかと思つています。ある意味では独創的なものかもしれません。我が国の土壌の中で出てきた1つの方向という形で書いた人が評価されてしかるべきものではないかと思つています。

そこで、この2つをどう選ぶかということで、最後まで論議されることになった意味もあつたわけです。本当に甲乙つけがたいというようなところで、研究論文としての内容につきましては、前者である狭間さんの方が整つてきていることは事実でございまして、田中さんのほうは、日本の土壌の中でかなり野心的なものがあるという点がございましてけれども、理論的にはさらにもっと整理をしてもらいたいものもたくさんあるというところが同時にございました。どう選ぶかということが問題になってきたわけですが、先ほど申し上げたような意味でやはり日本の土壌と経験に照らしまして、しかも新しい方向性を打ち出していこうという、非常に先駆的な内容を含んできているという点をかいまして、今後さらに発展していただくということを期待した上でこちらの方を今回入賞させていただき

